

新潟市医師会報

発刊50周年600号記念特集号に寄せて

前 新潟市医師会 会長 藤 田 一 隆

新潟市医師会報600号発行、おめでとうございます。創刊は1971年（昭和46年）4月ということですので、50年が経過しました。この間、一度も欠かすことなく発行できたのは、歴代の会報編集委員長の並々な熱意の下に業務を遂行された編集委員の先生方をはじめ、担当理事、担当職員の皆様の地道な努力の賜物であると思います。そして、それを支えてくださったのが、会報に投稿していただいた一般会員の先生方です。心より感謝申し上げます。

私が初めて新潟市医師会報に投稿したのは、2001年（平成13年）6月発行の会報363号で、『入会のご挨拶』でした。旧黒埼町の新潟市合併に伴い、西蒲原郡医師会黒埼班55名が新潟市医師会に入会した当時、班長であった私に原稿依頼がありました。右も左もわからない中で困惑しながらの執筆でありました。

新潟市医師会理事に就任した2002年（平成14年）4月は、会報373号が発行された月であります。当時は地域医療部担当でしたので、「介護認定審査会委員の選出方法」や「内視鏡を用いた胃がん検診制度」について、会報に記事を投稿することはありましたが、会報編集作業に参加する機会はありませんでした。

2006年（平成18年）に大川賢一会長から総務部長を拝命し、2008年（平成20年）10月に発刊された『新潟市医師会創立百周年記念誌』の編集委員に加わり、数編の執筆もさせていただきました。その中で困難を極めたのは、『市町村合併・区制に伴う班の再編』の項でした。現在の班制度の前身となった「隣保班」の発足時の記録が見当たらないのです。佐藤事務局長（当時）にお願いして古い記録を調べた結果、昭和18年には「隣保班」なるものが存在していた文書が見つかりましたが、それ以前の経緯は不明

のままでした。この経験を通じて、医師会活動を逐一記録として残しておくことの重要性を学びました。また、新生医師会発足間もなくの“手書き”の理事会議事録など貴重な文書を目にすることができ、大変勉強になりました。

その後、2010年（平成22年）に佐野正俊会長から副会長を拝命し、広報部も担当することとなり、毎月、会報編集委員会に出席させていただきました。初めて、実際の編集作業を目の当たりにした時の衝撃は強烈でした。担当委員が、原稿を一字一句丁寧に読み込んだ後、誤字・脱字は勿論、句読点や鍵括弧の使い方、場合によっては表現そのものにも疑義を唱え、その後委員会全体で検討していく様子は、緊張感が漂い、まさに真剣勝負でありました。このような過程があるからこそ、当会会報の品格や倫理観が保てるのだと実感しました。時に会報にそぐわない内容であると判断されると、掲載を見送られることもありました。最終判断をされる歴代委員長のご苦勞が推察されます。

2014年（平成26年）7月、会長に就任した際には、「組織率の向上」を目指して、勤務医の先生方へ情報発信すべく、会報に『病院だより』と『Doctor's Café』のコーナーを設けました。その後もいくつかのコーナー新設や配布先を拡充するなどして、当会からの情報発信を継続しました。

執行部役員を退任してからは、医師会活動の貴重な情報源として、会報は欠かせないものとなっています。小林晋一先生の表紙絵も毎回楽しみにしております。今後も、会報が医師会の“顔”としての役割を継続し、更なる充実を遂げることを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。